

シヨレムのブーベル批評

川田熊太郎

I はじめに

今年の春、ジャパン・タイムズで、シヨレムの新著の名を見たとき、それはメシヤ思想の著者シヨレムが、毎時もの手堅い手法で考究したる結果をまとめた一冊のモノグラフであろうと思つた。その書評も私にその感をもたせた。しかし、注文して入着して見ると、それは、著者の、機会に会う度に発表したる、それぞれ独立の、しかしメシヤ思想をめぐる諸論文が一冊にまとめられたものであることがわかつた。それらの諸論文の内容を此処で一つ一つ紹介するには躊躇を感じる。そこで、それらのうちで、メシヤ思想を直接に論じていないが、それと関係なしとは言われぬ一論文、マルチン・ブーベルのハンディズム解釈の批評の一篇を紹介することとした、というのには、ハンディズムに関する二人の論争は欧州学界で著名のものであり、またブー

ベルのことは我国においても幾分は知られてゐるからである。

II ブーベルのこと

シヨレムを私が知つたのはブーベルが彼の著作『ハンディズム物語』の序論の中にシヨレムの『ユダヤ教における神秘主義の重要な諸流』を参照せよとしてゐることによつてであつた。この書はたしかにシヨレムの力作の一つであつて、私は深く感銘した、というのには、その材料の、ほとんど、すべてが未刊行の、写本の探究により得られたものであり、考証は該博であり、そして論断は適確であるように思われたからである。彼は本書のうちではスピノザを論ずることをも忘れてはいなかつた。なお、ブーベルがシヨレム此の書を挙げてゐることは、ブーベルのハンディズムの取扱方にシヨレムが不賛成であるので、私の注意を引いたのであつた。

それならば、ブーベルを私は如何にして知つたのであつたか。太平洋戦争より可なり前に私は、たまたま菅田吉博士にお目にかかる機会をもち、それ以来、御指導をうける幸をもつた。菅氏は、よく知られてゐるように、キリスト教神学の大家であるが、惜しいかな、本年九月に逝去された。その当時の私にはキリスト教は、まるで、見当がついてゐなかつた。ヨーロッパ哲学というのは、われわれが一般に接触する限りでは、キリスト教から離れては理解できないから、その理解のために、自然にキリスト教が問われることとなつてくるのである。たまたま、幸に菅博士と対話する多くの機会が与えられたのであつたから、私は彼にいろいろとお尋ねした。そして彼の返事からして私は、自分はキリスト教をまだ知らぬもの、と知つたのであつた。また或時彼は言つた、西田博士の『我と汝』の出る前に彼は、乞われるままに、資料を西田博士へ送つたことがあつた、そのうちにはブーベルの「イヒ・ウント・ドゥー」があつたと。しかし私が菅氏からブーベルの名を耳にしたのは、それよりも前、氏の研究室をおたづねした時にであつた。しかしブーベルの著作を購読する気は、その頃は、起らなかつ

た。

しかし、それより多年の後、ふと思出して『イヒ・ウント・ドゥー』を読み、また、『ハンディズム物語』などを読んで大いにプーベルに興味を覚えるに至り、彼の主なる著作には目を通し、彼の著作選集全三巻をまで購入したのであった。その第一巻は哲学の領域に所属する論文と著書を収めている。第二巻は聖書(旧約)に関するそれらを、第三巻はハンディズムに関するそれらを。故に、これからの研究者は此の選集全三巻から出発するのがよい。というのは、これによりてプーベルの業績の見通しを先づ持つことができるから。

然らば、彼の著作を読むことによりて人は何を得るであろうか。この問に対する答は、勿論、それを読む人によると言われうる。しかし人によりて得るものが全く異なるのではなく、共通するものも多くあるであろう。この見地から、キリスト教をよくは知らず、ユダヤ教については全くの無知に近かった私の注意を強く引いたことどものうちの数個を挙げることにする。

(一) 我と汝『イヒ・ウント・ドゥ』(Ich und Du)は一百頁に足るか足らぬかの小論

文又は小冊子であるが、これがプーベルの哲学の基礎の書である。彼はこの書において元の言葉を「我と汝」と「我とそれ」との二であるとする。「汝」は、究極においては、ユダヤ教の神であり、「我」はこの神によりて話しかけられる者であるが、しかし他面においてはユダヤの神である。「それ」とは「我」でも「汝」でもなくて「物」である。この「それ」を究極せしめたものがプラトンのイデアである。そして此の「我とそれ」と「我と汝」とは全く異なる思惟方法である。前者はギリシア的思惟方法であり、後者はユダヤ教的思惟方法である。そして二者は混合せられることを許さない。ウバニシヤドの思想は「我とそれ」の思惟方法のもの。そして仏陀は存在の根源に向いて「汝」と言うことを知っていたが、これについては沈黙していたのであった、とプーベルは言う。ただし、これは小乗のこと。大乘は仏陀の名の下に、人間の永遠なる「汝」に呼びかけた、そして将来仏として愛を充実するべき者を待望している、とプーベルは言う。この彼の言は、仏教をもってギリシヤ哲学やウバニシヤド哲学とユダヤ教との中間とするものではないであろうか。

(二) それは兎に角として、この「我とそれ」との思惟方法を用いる哲学とユダヤ教との混合を彼は強く排撃している。故にヨーロッパ哲学史のうちにて重んぜられるユダヤ人哲学者達をも、ギリシヤ思想との混合の故に、承認しない、アレクサンドリアのフィロン、マイモニデス、スピノーザなどを。そして最近の人としてはマールブルク学派と呼ばれる新カント学派の創立者であり、中心であった所のヘルマン・コヘンを斥けている。或時、コヘンは神について講演したが、その終了後に一人のユダヤ人が神は何処におられましかと問いたるに、コヘンは答えずに、涙を流したという逸話を挙げている。これはコヘンの新カント学派的思惟方法によりてはユダヤの神はとらえられぬことを、プーベルは意味するのである、というのはマールブルク学派の思惟方法は、プーベルからすれば、「我とそれ」の思惟方法であるから。

(三) 信仰の二途 右の根源の言葉の見地から、プーベルは信仰の二途 *Zwei Weisen des Glaubens* を言う。それは使徒パウロスによりてギリシヤ人の「我とそれ」の思惟方法が導入せられてよりの信仰とそれよりも前からの、この思惟方法によりて毒せられぬ信

仰とを意味する。勿論、この信仰はヘブライズムの内にてのことである。

(四) 神の蝕 ブーベルはユダヤ教の人であるから、聖書は、彼にとりては、旧約のみである。彼はナザレのイエスを、勿論、キリストとは認めないが、しかしイエスの信仰を正しきものと認めている。この信仰が曲げられるのはパウロスによりてであるとする彼は、更に使徒より後のキリスト教の歴史を考察して、その歴史のうちに本来の信仰から離れ、逸脱する幾多の事実を挙げ、そこに神の蝕 *eclipse of God, Gattesfnsternis* が起っているとする。勿論、これはブーベルのユダヤ教からのキリスト教批判であるが、このようにキリスト教が見られうることを知るのには、キリスト教やユダヤ教を正しく知ろうとする我々には良薬である、けだし、いづれも無尺度に、ただ、賞讃せられるだけ、よきものものと宣伝せられるだけでは、それぞれの実実は却ってかくされるのである。

(五) モーゼ 彼はユダヤ人としてモーゼに人々の注意を向けしめる。我々の間にはモーゼの名を知るも、そのモーゼがユダヤ人及びユダヤ教にとりて持つ意義には無頓着な人が多いかと思われ、そして他のことどもに

気をとられていた私もその一人であった。しかしブーベルの著作『モーゼ』を読むことによつて、彼の重大な意義を知らされたのであった。そして、あの十誡のみならず、あの燃ゆる茨の深義を知らされた。この燃ゆる茨の中にユダヤ教及びキリスト教、即ちヘブライズムの神学の根本問題がひそんでいるのである。この点はヨゼフ・ラッテンゲルの『キリスト教入門』*Einführung in das Christentum* を併せて見れば、一層、明らかとなる。あの燃ゆる茨の内から旧約の神は『われは有る者である』と自己を啓示した。それが「ホ・オーン」であり、「エゴ・スム・クイー・スム」である。此の「有る者」を、ギリシア人の存在学を以て解するか、又はヘブライズムに固有の仕方で解するか、これが神学の分岐点を成している。

(六) ブーベルの哲学は、或は実存主義と言われたり、或は新ヒューマニズムと言われたりしている。しかし彼自身は自分自身の哲学を何と名づけるかを述べていないようである。それは、或は実存主義の或はヒューマニズムの要素をもっていると言われなくても、キエルケゴールやヤスベルスなどの実存主義によりて、又はルネッサンス以来のヒューマニ

ズムによりて、残りなく言表わしつくされうるものではない。それは、異なる系統の思想の流入によりて混濁せられたるユダヤ教を、その混濁から清浄にし、本来のユダヤ教を回復し、発展せしめようとするもの。それは近代のユダヤ哲学であり、そのうちのブーベルズムと呼ばれるより他はないものであろう。

この哲学の方法論は対話法 *Dialogik* である。それはイヒ(我)とドゥー(汝)との活きている対話なのである。それは一方が話しかけ、他方が承け答えるのである。此の対話は微妙なものであって、各自の心が相手の心へ向つて開いているときには成立するが、いづれか一方の心が、何らかの意味にても、開いていなければ、成立しない。それはエス(それ)たるアイデアを探索する問答法、即ち辨証法 *Dialektik* ではない。

かくて神が話しかけ、人が承け答えるのであるが、ブーベルは神と人との間には「根元的距離」があり、しかも二者の間には「関係」があるとする。これは本来のユダヤ教の考え方なのであるが、一方においては、神と人との間の距離を可能なる限り短縮し又は神と人との間の距離を無くする神秘主義(ドイツ観念論)に反対し、他方においては、か

くの如き神秘主義に反対して、二者間の距離を力説する「距離神学」Distanztheologie又は「辨証法神学」dialektische Theologie(バルトなどの)に通ずる点をもっている。

神からの話かけ、これをプーベルは聖書(旧約)において見る。即ち聖書は神の話しかけの言葉であるとして、あの聖書翻訳の大事業が遂行せられた、はじめのうちは若きローゼンツワイクと共力して、この共力者の死後は独力にて。

これは、プーベルにとりて、第二の出発であったが、しかし、回顧すれば、彼が四十五才にて得たる「我と汝」という根本原理の徹底でもある。

(七) ハンディズム ハンドは敬虔なる者を意味し、その人々の共同体がハンディムと呼ばれる。そして、これはユダヤ教のうちに長い歴史を持っている。しかしプーベルが研究し物語っているハンディムはイスラエル・ベン・エリーゼル、即ちパール・シエムによりて第十八世紀中頃に創立せられ、それから約百年ほどは隆盛であったハンディムである。この共同体を指導したのはザッディキムと呼ばれる多くの秀れたるラッピであった。そして、そのザッディキム達について多

くの敬虔なる言行が伝承せられている。その言行はモーセの五書(Torah)を尊重し、そのうちに神秘を見る所の、世に背をむけているのではなくて、反対に世に面を向けている所の、神秘家達のものである。しかし、その伝承は断片であった。プーベルはそれらを拾集し、それを資料として、多くの文学的物語としてしている。

例の一 ラッピ・アロンに一人の親しい友があった。しかも遠く離れて生活していた。あるときその友が帰郷の旅行に出でて、アロンの近くへ来たので、夜おそく、時間をかまわずに訪問する。その訪問を受けたアロンの二階には燈火が見えた。それで友は大声にて案内を乞うた。二階にいたアロンは誰かと問う。「我だ」と答える。我だと言う者には戸を開けてやれぬ、「我」はただ神のみのものであるから、と大声にて言つて、アロンは友を遂に内へ迎え入れなかつた。

例の二 レヴィ・イーシャクはかく歌うのが常であった。「わが行く処に——汝。わが立つ処に——汝。ただ汝、また汝、常に汝。汝、汝、汝。われ幸福なれば——汝。われ不幸なれば汝。ただ汝、また汝、常に汝。汝、汝、汝。天——汝、地——汝。上——汝、下

——汝。われ何処へ向うとも、行く果のすべにて、ただ汝、また汝、常に汝。汝、汝、汝。」例の三 ある時の旅行の途中にて、ラッピ・スヌヤに起つたこと。彼は岐路へ来たがいつれの道をとるべきかを知らなかつた。そのとき彼は眼を挙げた、そしてシエヒナが彼を誘導しているのを見た。——プーベルによればシエヒナはエホヴァの妃神であり、後代にユダヤ教が、ヒンドゥイズムの影響の下に、取入れたもの、そして祖国から追放せられ流浪するユダヤ民族の象徴である。

このような物語を読めば、人は禪の語録を想起し連想するであろう、そしてハンディズムは禪宗に似ていると言われる。如何にも。しかし二者の間には根本的差異のあることを忘れてはならぬ。

Ⅲ シヨレムのプーベル批評

(1) ゲルシヨム・シヨレム

彼を私は、右に述べたるが如く、プーベルの著作を通じて知つたのであるが、しかし今日もなお、彼についての詳しいことはわかつていない。知られているのは簡単な、しかし重要なことのみである。シヨレムは多くの人

々によりて知られている『ユダヤ教における
神秘主義の重要な諸流』Major Trends in
Jewish Mysticism や、その他多くの書物及
び論文の著者である。『ユダヤ教におけるメ
シア思想』は、彼の“On the Kabbalah and
its Symbolism”の伴侶として読まらるべきも
のと言われている、そして、また現代（ユダ
ヤ）神学との関係が深い諸論文を一冊にまと
めたものとせられている。彼はヒブル・ユ
ニヴァシティの名譽教授であり、かつてはユ
ダヤ教神秘主義を担当していた。勿論、私は
ユダヤ教やその神秘主義を研究している者で
はないが、仏教思想とキリスト教哲学との対
比は、自然に人をしてユダヤ教をも考えしめ
る故、プーベルの著書論文を見、そして彼の
論敵たるシヨレムに関心をもったのであつ
た。

(2) プーベルのハシディズムについて

プーベルのハシディズム解題を批判的に分
析しようとするれば、人は、そもその始めか
ら、或る特殊な諸困難に直面することとな
る。そのうちで最大なるは次のもの。プーベ
ルがハシディズムの諸文献の正確な知識を持
っていることは、これを、何人も否定しない

が、しかしプーベルは、ハシディズムに関し
ては、自己の主張を支えるための、明瞭な関
係の文献資料を示す学者の如くには、書いて
いない。彼は彼の目的、即ち、ハシディズム
を歴史的現象としてではなくて、精神的現象
として人々に示すこと、に適當なる諸の事実
と諸の引用文とを結合するのである。彼は、
しばしば、言っている、私は歴史に興味があ
い、と。これは、等しき重要性をもつ所の、
二つのことを意味する。第一。ハシディズム
を歴史的現象として理解するが為にはそれら
が大なる意義をもっているであろうとも、
多くの資料をプーベルは省略し抜かして考察
しようとしてもしない。第二。彼は選出したる資
料を、しばしば、その資料の意味の彼なり
の、彼流の、解釈と密接に結合せしめるので
ある。

プーベルを批判的に読む者にとりての更に
一つの大なる困難は彼、プーベル、自身の発
達或は発展の事情と結びついている。プーベ
ルは、宗教的神秘主義の熱心なる讃嘆者、又
は信者として、彼の著作者としての生涯を始
めたのであった。彼がハシディズムの文献と
伝承とに初めて接触したときに、彼の心を強
く打ったもの、それはハシドの運動のうちに

生きているユダヤ教の神秘的なる核心がある
ことを彼が見出したことであつた。その当
時、彼はハシディズムをユダヤ神秘主義の
華、習性となれるカッバラなりと見たのであ
つた。しかし数年後に彼の思惟は発展をとげ
て、彼の見解を甚だ深く変化せしめたのであ
つた。この変化の性格は『ダニエル——実現
についての対話』(一九一三)と『我と汝』
(一九二三)との間に在る距離によりて彼の
哲学的諸著作のうちに現われている。此処で
彼は神秘主義の世界を断念して、新しい立
場をとつた。この立場は彼を、今日ならば宗
教の実存主義とも呼ばれうるものの第一線
へ、立たしめたのであつた、如何にもプーベ
ルは此の宗教的実存主義という術語を用いる
ことを努めて回避しているのであるが。しか
し、この新しい段階においてもプーベルは依
然として続けてハシディズムのうちに彼自身
の諸見解の実例を見出しつづけている。ここ
に問題がある。

この段階においてプーベルはもはや、以前
の諸著作においてとは異りて、カッバラとハ
シディズムとの本質から見られる同一性を強
調しない。この二つの現象の間に強き連鎖の
あることを彼は認めているが、彼は二者間に

本質的差異ありとの見解を樹立し維持するこ

とに専念している。この時になると彼はカッ

バラを持出す時には、これをグノースとい

う。これはこの時には賞讃の言葉ではない。

プーベルはハシディズムの内にて二つの矛盾

する形態の宗教的知識が働いていると見るの

である——たとえ、この運動の創始者達がこ

の分裂に気づかずかずにいたとしても。カッバラ

の伝承がその一方を決定した。こちらの方は

神聖なる諸の秘儀の知識を、少くともそれら

を洞見することを狙っていた。従ってハシディ

イズムを必然的に神智学的思辨へ導入するも

のであった。如何にもプーベルは、ハシディ

ズムがルリアのカッバラの枠内で発展したこ

とを完全に熟知していた。しかし、このカッ

バラのグノース主義はハシディズムのうち

にありて真に創造的要素ではなかった。この

グノースの諸概念という道具をハシディズ

ムの巨匠達は用いているが、しかし彼はそれ

ら諸概念の基礎的意味を、神聖なる諸の秘儀

の範疇から人間の、そして人間と神との出会

の世界へ、移し入れたのであった。プーベル

によれば、これがハシディズムの真に創造的

なる側面であった。そして、究極的に見れ

ば、重要な創造的衝動である故、彼はハ

シディズムにおけるカッバラの、又はグノ

ースの要素を、ほとんど完全に無視してよい

と感じたのであった。彼にとりて、この要素

は一種の臍の緒であって、新らしき靈的被造

物が独立のものとして存在するに至れば直ち

に切断せらるべきものである。然らざれば、

新らしき現象は独自なるものとして見られる

ことも理解せられることもありえないのであ

る。

しかし、ここから彼の短所が出ていたので

ある。如何にもプーベルがハンドの伝説や言

葉を人々に示している事の功績は甚だ大であ

る。しかし彼がハシディズムに関する後の著

作の内へ読み込みたる靈的メッセージは、宗

教的無政府主義と実存主義とを内容とする彼

自身の哲学を出自とする思想と余りにも固く

結合し過ぎていて、ハシディズムの文献その

ものに根抵をもっていない。かくの如きハシ

ディズムの記述は、余りにも多くの物を看過

しており、そしてその記述のうちに包含せら

れているものには個人的思想が這入りすぎて

いるのである。若しわれわれがハシディズム

という現象の真実を、その偉大さと頽廢とに

関して、理解しようとするのであれば、われ

われは最初の第一歩から、新しく出発しなけ

ればならぬ。

右は、シヨレムの丹念にして尊敬せらるべ

き批評の摘要たるに止まる。しかし、これは

ハシディズムに関するプーベルの著作の成功

面と失敗面とを極めてよく明らかにしてい

る。プーベルは創作的にハシディズムをとら

え、叙述しているが、シヨレムは年期を入れ

て資料を身につけた学者として、それに不満

を表明しているのである。

(3) 『ユダヤ教におけるメシア思想』

右のプーベル批評は“The Messianic Idea

in Judaism and Other Essays on Jewish

Spirituality, by Gershom Scholem. Schock-

en Books, New York 1971,”に収録せられ

ている十七篇の論文のうちの第九の“Martin

Buber's Interpretation of Hasidism” pp. 227-

250の要点のみを摘出したもの。シヨレムの

厳密なる・入念なる・芸術的なる論文を直接

に読むことは何人にとりても無駄ではないで

あろう。

しかし、此の論文集の諸論文はハシディズ

ムをではなくて、メシア思想を中心としてい

るもの或はこれをめぐるものである。それ等

ディズムであった。

によりて、本書の前半にては、先づメシアの概念が明瞭にせられ、ついでカッバラにおけるその概念の変形、そして遂にザツパタイ及びフランクによるメシア思想の逆説的形態までが取扱われている。そして本書の後半に至りて現代ユダヤの知性の歴史が論じられる。ブーベル批評はこの後半のうちの一編である。

Ⅳ むすび

仏教への関心、欧州哲学の考究は、はしなくも、私をして現代ユダヤの二人の大なる思想家の著作をいくらか読ましめた。それを通じて察知しうることは特にユダヤ人の神の超越性ということである。メシアの出現は神の側からのものであって、人間の側からのもではない。故にカール・ヤスペルスが此の神を「超越者」die Transzendenz と言表わしているのは当を得たものである。これをドイツ観念論の人々はキリスト者の立場から「絶対者」das Absolute と、好んで、呼んでいゝる。この超越者を生きるがための一つの道、それが、イスラエル・ベン・エリーゼル（一七〇〇—一七六〇）によりて第十八世紀の中頃にポーランドにおいて創立せられたるハシ